

家具配置における基礎的設計資料に関する考察

丸 茂 みゆき*

A Study on Basic Data for the Planning of Furnishing Pattern

Miyuki Marumo

要 旨 住宅の計画は、どの部屋にどのような家具が基本的に配置されて部屋がしつらえられているのかを把握していなければ、適切な設計がなされない。しかし、今日の住宅はライフスタイルの多様化と、それにもなった住宅の平面・インテリアへの要望が多様多様になっており、部屋に対する家具の配置も今までとは異なった状況であると想定できる。その為、設計資料の既存データとして提供されている、基本的な家具の形状や寸法とは変化してきている状況が考えられる。そこで本研究では、現在居住している住宅を対象に家具配置に関する調査を行い、家具配置において基本となる設計資料を求めることを目的とした。

分析は部屋と家具の種別を分類整理し明確化することとした。その結果、「部屋の和洋形式の違いにおける家具配置の特徴」「収納家具の大型化や座家具の小型化などにおける標準的寸法・形状からの変化の動向」「行為ごとに分類された部屋ごとの主要設置家具の明確化、それに伴う家具の占有状態」が導き出され、設計資料の基礎的データとして活用できるものをまとめることができた。

1. 本研究の目的・調査概要

住宅を住めるようにしつらえることは家具を配置することによって成り立つため、間取りを設計するときには、その部屋ごとに必要とされる家具を置けるスペースが確保されるべきである。その為には基本的な家具の形状や寸法を把握している必要があるといえるが、ライフスタイルの多様化にあいまって、基本とされているものが、変化してきている状況が考えられる。今後は、このような事柄を考慮した住宅を設計し供給していくことが、住宅における社会的要請となってくると想定されている。

実際に設計の際に参考としている、基本的な

家具における寸法・形状・配置に関するデータ)をみると、必ずしも現状にあったデータであるとは言い難く、適切な設計資料となるデータが求められているといえよう。

そこで本研究は、現在実際に居住されている住宅において一般的に使用されている家具の形状・配置に関する調査・分析を行い、住宅の設計資料として住戸や居室の面積、形状を決定する際に活用のできる、基礎的データの提示を行うことを目的とした。

調査概要は以下の様になっている。首都圏に建設された戸建住宅・集合住宅で、大学生の子供のいる家族が居住する住宅に対して、家具配置に関するサンプル調査を行った。したがって、居住者層は中年核家族世帯が中心である。

事例数は51サンプル。調査内容は、基本属性として、居住者の属性と建物の属性。部屋・家

* 本学講師 住居計画

具関連項目としては、住宅平面の採集をし、生活行為との対応、部屋形状、家具配置を把握した。更に、使用している家具については寸法、購入時期、収納状態を記入してもらった。

2. 住宅平面・家具配置の動向と既応研究

まず、近年の住宅平面の動向と、住まい方からみて「家具配置」はどのような意味をもち設計資料として把握すべきかなど、基本的な考え方についてまとめる。

近年の住宅では、間取りの多様化が進んでいるといわれ、その要因には以下が挙げられる。

1つめに、居住者層による相違である。家族人数や家族構成等が多様化すると、住宅の規模、居室数、居室構成等も一定のもの（例えば3LDKなど）ではない住宅が求められる。今後は、家族人数の減少、核家族以外の世帯の増加等が見込まれている事からも検討する課題がある。

2つめに、ライフスタイルによる相違についてであるが、居住する人のライフスタイルによって、求める住宅が異なる傾向が強い。重視する項目が違えば、住宅の各居室の配置、規模、家具の選択基準が異なってくると考えられる。

3つめに、ライフステージによる相違である。近年の住宅は、長期間住まう事が可能な住宅を供給する方向に動いている。一定の間取りであっても、年数が経過する中で、生活の変化に対応して、部屋の使用者が変わったり、それにもなって家具配置を変化させることが生じる。

家具配置の実態を把握した既応研究には、当研究室で行った調査²⁾³⁾がある。これによれば、部屋の規模・形状が良くないため、必要な家具が置きにくい部屋が多い。部屋の規模の不足、部屋の内法寸法の不足など、人間の動作に困難な居住環境となっている実態が多々みられる。これは、家具形状と部屋の形状・規模の不一致といえる。

また、開口部と家具との関係がうまくいかず、窓や部屋の出入り口をソファや、タンスで一部ふさいでしまった事例もみられた。

以上のような課題、問題点を改善し居住環境を整えるため、さらに詳細なデータとして、家具の寸法・形状や、部屋ごとに主に置かれる家具についてなど、基礎的なデータを抽出して提示する必要がある。

3. 家具配置に関するサンプリング調査の結果

3-1 基本属性

本調査対象の、基本属性について概観しておく。

〈家族人数〉 本調査対象は、本学大学生の子女のいる家族が対象である。したがって家族人数は「4人」が約半数を占め、ついで「5人」が続く。

〈建物タイプ〉 建物は、東京を中心とした首都圏に立地する住宅であり、「戸建住宅」が2/3、「集合住宅」が1/3を占めている。

〈延床面積〉 建物の規模をみると、延床面積が「75~100 m²」が最も多く1/3を占め、「100~125 m²」が1/4、「50~75 m²」と「125~150 m²」が1/8のバランスとなっている。平均では100 m²規模の住宅といえよう。

〈築後年数〉 築後年数は「20~25年未満」が最も多く1/4近くを占める。ついで「10~15年未満」「5~10年未満」と続く。

〈生活経過年数〉 その住宅に住み始めてからの年数をみると、「10~15年未満」が最も多く1/4以上となっている。

3-2 部屋・家具の呼称と機能分類

部屋と家具の名称は使用者それぞれの呼び名があり、必ずしも形状に沿った呼称を使用しているとは限らない。その為部屋・家具ごとに、その形状と家具配置状態を分析するためには、それぞれの種別を明確化する必要がある。そこで、はじめに部屋と家具の分類整理を試みた。

部屋の分類方法は、使用者が主にそこで行っ

表1 部屋の種類

	部屋分類名	生活行為	室数
公室 関連	K: 調理室	調理を行っている	22
	D: 食事室	食事をしている	2
	L: だんらん室	だんらんをしている	7
	DK: 調理兼食事室	食事+調理を行っている	5
	LD: 食事兼 だんらん室	だんらん+食事をしている	36
	LDK: 調理兼食事兼 だんらん室	だんらん+食事+調理を している	24
私室 関連	子供部屋	子供が就寝室として使用 している	92
	親の部屋	親が就寝室として使用し ている	54
	祖父母・叔父母の部屋	祖父母・叔父母が寝室と して使用している部屋	14
上記 以外	書斎・趣味室	仕事・趣味をする場合の み使用している部屋	15
	和室・客室	特定の人が使用せず、接 客や趣味に使用している 部屋	17
	その他の居室	生活行為や機能が特定で きない部屋または空き部 屋	8
	納戸	物を収納するための部屋	20
	居室以外	洗面・トイレ・浴室・玄 関・ホール・廊下	76

ている基本的な生活行為を軸に機能分類した。表1がその結果である。居室が13種、居室以外が1種に類別された。本稿の分析では、サンプル数の少ない居室を除くこととし、「K」「LD」「LDK」「子供部屋」「親の部屋」「祖父母・叔父母の部屋」「書斎・趣味室」「和室・客間」の8種の部屋について行うこととする。

次に家具については、収納状態に記載された収納物の種類と形状によって分類し、表2がその結果である。まず、大分類としては、機能を大きく括る意味で、「収納家具類」「座家具類」「家電類」「その他の家具」とし、中分類としては、家具の機能種別ならびに備考欄記載事項を軸に分類した。ここで「家具」としてみなしたものは、移動が可能であり、大きさの目安として家具体積が0.05 m³以上のものを指す。

また、家具の配置状態へ影響を与える要因として、参考的に「造りつけ収納」についても類

別を行った。

3-3 主要家具と造りつけ収納の形状および動向

ここでは、主要家具で一定量以上のサンプル数が得られたものについて、その形状(W幅・D奥行き・H高さ寸法)の分布状態を示し、家具の寸法の標準的な数値を示す。また、家具形状が年代的な推移に伴い、どのように変化しているかの考察を加える。これは、保有家具の購入年代順に寸法変化をリストアップした表によっているが、ここでは紙面の都合で表を割愛している。

(1) 収納家具類

図-1に形状を示した。

〈食器棚〉 標準的な形状は、D=300~450, W=900~1350, H=1800~2000である。H=2000以上や、W=1350以上の、大型形状の「食器戸棚」もみられるが、これは1980年以降購入のものであり、今後は、幅・高さともに大きな寸法のものが進出してくと想定される。

〈サイドボード〉 D=400~500, W=900~1800, H=600~1200などが寸法の分布であり、形状は多様である。食器棚にくらべると横長形状のものも多く、サイドボードは本来高さが低いものである。しかし呼称をみると「リビングボード」「カップボード」などがあり、近年はより高さの高い家具として、上半分がガラス戸や戸棚になっているものが進出傾向である。
〈洋服タンス〉 D=450~600, W=600~1350, H=1800の形状が標準的なものである。

洋服タンスは、ハンガー使用の収納形式からみてD=600が一般的と想定されるが、D=450のものもみられ、これは整理タンス等と奥行きを揃えるデザインと推察される。

H=2000くらいで、しかもW=1200~1500の、大型形状の「洋服タンス」もみられるが、これは1980年以降購入のものであり、今後は、幅・高さとも大きな寸法のものが進出してくと想定される。

〈整理タンス〉 D=450, W=450~1200, H=700~1400・1800の形状が標準的なものである。

表2 家具・造り付け収納の分類

家具大分類	家具中分類 (機能名)	家具呼称	備 考	
家具類	食器棚	食器棚/食品庫/カップボード	・主として食事の為に使用する食器類、調理器具を収納するもの	
	サイドボード	サイドボード/ローボード/リビングボード	・主に食器類、酒類を収納するもので、部屋の雰囲気を演出する飾り棚として使用するもの	
	洋服タンス	洋服タンス/クローゼット/ワードローブ	・衣類を収納するもの ・主として開き扉型で、内部にハンガー掛けがあり吊り下げて収納する ・ハンガー掛けがあるかを要図で確認できない場合は、収納物に「コート、スーツ」と記入のあるものを含む事とする	
	整理タンス	整理タンス/引出し/チェスト/ベータータンス	・衣類を収納するもの ・主として引き出し型で、寸法がW・Dともに400以上、H 500以上の物とする ・上部に鏡がありドレッサーの機能がある、引き出し型の物を含む	
	和タンス	和タンス/着物タンス/桐タンス	・着物を収納するもの	
	本棚	本棚/整理棚/収納棚/書類棚	・書籍を半分以上収納しているものとする	
	押入タンス	押入タンス	・押入の中に入れて使用するタンス	
	ハンガーラック	ハンガー掛け/洋服スタンド/ハンガーラック	・洋服を掛けて納めるもの バイブハンガー式で囲いが無い	
	雑収納家具	物入れ/下駄箱/ラック/テレビ台/電話台/パソコンラック/ワゴン	・収納物を特定できない家具 または衣類、書籍、食器以外の物を納める家具 ・何かを乗せる為の家具 ・ラック、タワー型でパソコン用を置く台を含む	
家具類	ダイニングテーブル	ダイニングテーブル/テーブル	・食事をするためのテーブル H 600以上	
	ローテーブル・こたつ	テーブル/座卓/こたつ/ガラステーブル/センターテーブル/リビングテーブル	・食事、だんらん、作業用のテーブル H=450以下	
	机	学習机/勉強机/事務机/パソコン机/机	・書き物、勉強、作業用のテーブル 作業面がH=600以上 ・パソコン用でラック、タワー型でも、作業をするスペースがあれば机とみなす	
	その他のテーブル	サイドテーブル/コーナーテーブル	・上記の3つに含まれないテーブル	
	ベッド	ベッド	・寝るためのもの	
	ダイニングチェア	ダイニングチェア/イス	・食事をするときに使用するイス	
	休息用イス (1人用)	ソファ (1人用)/オットマン/イス/マッサージチェア	・くつろぐときに使用するイス	
	休息用イス (複数用)	ソファ (長い)/ソファベッド	・くつろぐときに使用し、2人以上が同時に座ることが出来るイス	
	事務用イス	机のイス	・書き物、勉強、作業用に使用するためのイス	
	その他のイス	楽器用のイス	・ピアノ、エレクトーン用など、楽器を使用するためのイス	
家電類	冷蔵庫	冷蔵庫		
	ステレオ	オーディオセット/MD コンボ/CD コンボ/CD ラジカセ	・CD, MD, カセット, レコードなど、音楽を聴くためのもの全てを含む	
	テレビ	テレビ/大型テレビ		
	パソコン	パソコン		
	その他の家電機器	洗濯機/スピーカー/エアコン等	・上記に含まない全ての家電機器	
その他の家具	楽器	ピアノ/エレクトーン		
	楽器以外のその他の家具	調理台/仏壇/鏡等	・上記の分類に含まない全ての家具	
造り付け収納	造り付け収納大分類	造り付け収納中分類 (機能名)	造り付け収納呼称	備 考
		押入れ	押入れ/物入れ/地袋/天袋	・中段以外の造作が無いもの 主として布団を収納する D=900周辺の寸法
		クローゼット	クローゼット/物入れ	・衣類を吊るすハンガー掛けがあるもの D=450~900周辺の寸法
		ウォークインクローゼット	ウォークインクローゼット/納戸	・人が入って物を出し入れするスペースがあるもの W, D=900以上
		その他の造り付け収納	キッチンユニット/調理台/食器棚/戸棚/本棚/物入れ/吊り戸棚	・衣類、布団以外の収納物をおさめている物 ・多様な内容物を収納しているもの ・機能が上記の3つに判断不可能だった物を含む

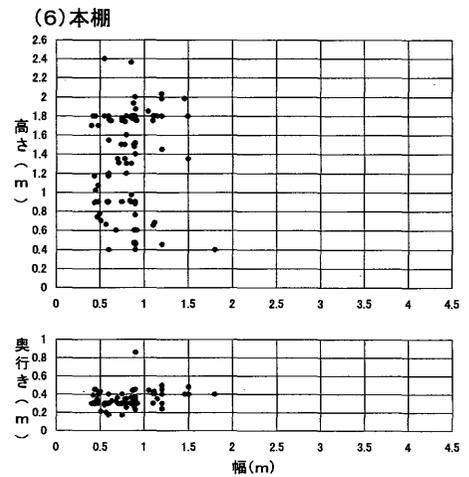
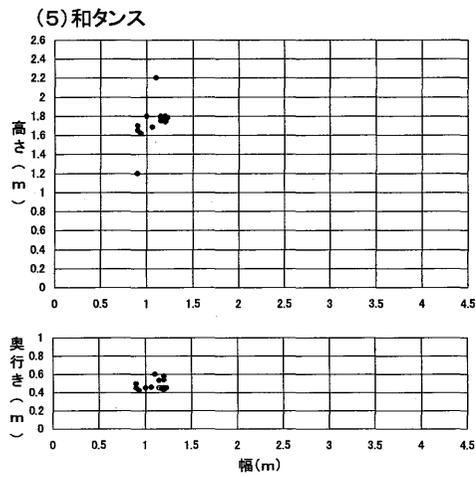
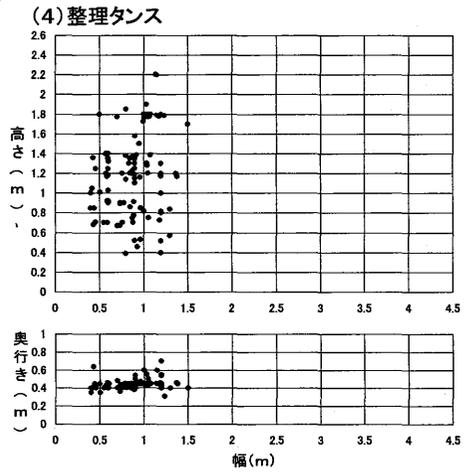
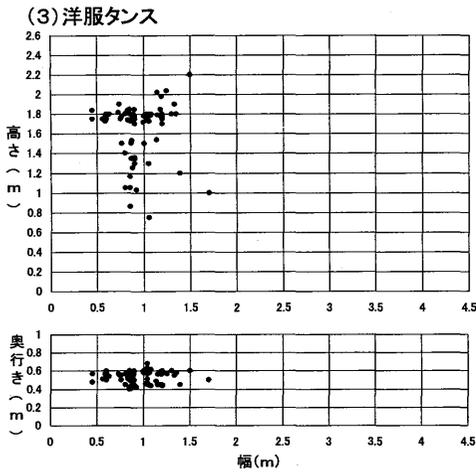
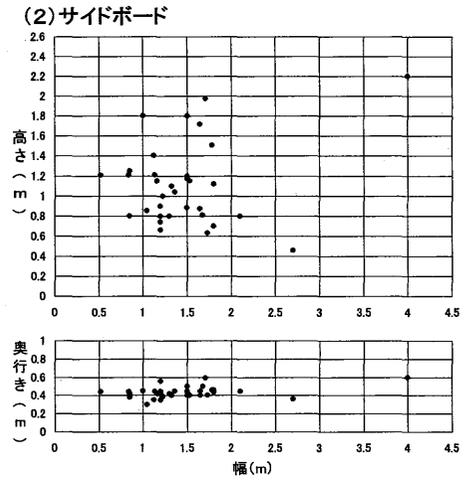
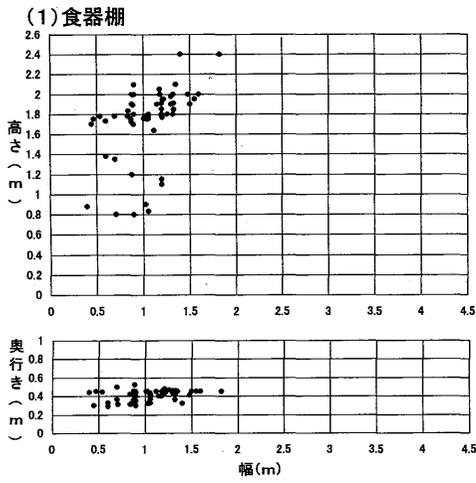


図1 収納家具類の形状

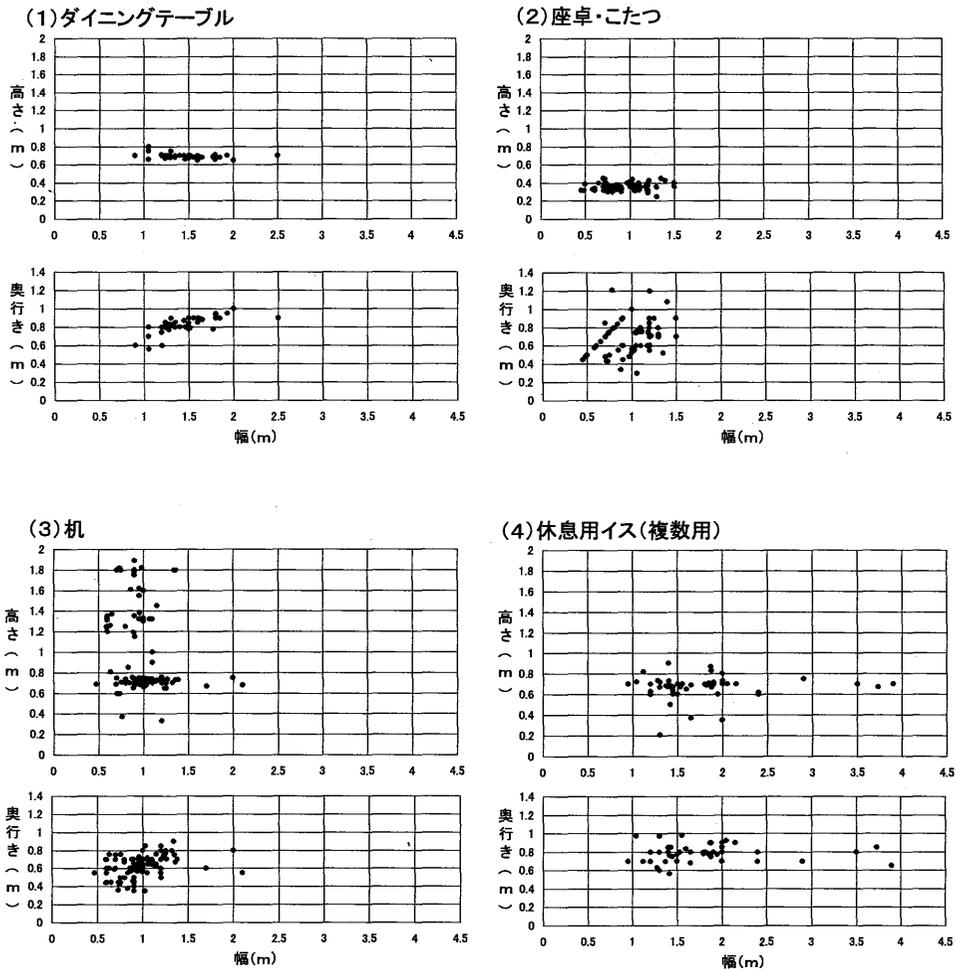


図2 座家具類の形状

全般的には、奥行きは集中的な数値となっている。H=2000以上の背の高いものは1976年以降購入に見られ、近年は幅が大きく高さが小さい横長形状のものや、幅・高さともに小さい小型形状のものなども進出しており、形状の多様化の傾向もみられる。

〈和タンス〉 D=450, W=900~1200, H=1600~1800という形状に集中しており、標準的な寸法を保っている。

〈本棚〉 D=300~450, W=450~1200, H=450~1800の形状が標準的なものである。H=2000以上の高さの高い本棚は、1980年以降購入のものであり大型化の傾向もみられる。また、

近年購入のものでは、一部に幅が広く高さの小さいものや、幅・高さともに小さなものなども見られる。したがって、全般的に形状の多様化の傾向が進むと想定される。

収納家具類の形状寸法の動向をみると、食器棚・洋服タンス・本棚などで、H=1800を越える壁面的収納への動向がみられる。また全般的に、収納量の確保を意図した、幅・高さ寸法の拡大傾向が進行しているが、こうした動向と合わせるようにして補足的に用いる、より小型形状の家具も進出する傾向がみられた。したがって、家具形状という点では、多様化の動向が顕在化しつつあるといえよう。

(2) 座家具類

図-2に形状を示す。

〈ダイニングテーブル〉 H=700, D=750~900, W=1050~2000の形状のものが標準的なものである。高さは集中しているものの、幅と奥行きは多様である。また、W=1800以上の大型家具は1980年以降購入のものにみられる。この寸法は、6人が掛けることも可能な寸法であり、接客時の座席を確保するような考え方や、ダイニングテーブルでだんらんも行うなどの動向を示唆していると思われる。

〈ローテーブル・こたつ〉 この範疇には、座卓ならびに、ソファの前に設置するセンターテーブルなどを含んでいる。この家具は、H=350~450, D=450~900, W=450~1350の形状のものが標準的なものである。平面の形状的には正方形のものと、長方形のものがある。

〈机〉 机の範疇には、勉強机・書斎机などが含まれるが、H=700および1300~1800, D=450~800, W=600~1350の形状のものが標準的である。1990年以降には、パソコン机(タワー型を含む)を購入した事例がかなりの数に登り、高さの高いものの増加の理由となっている。

〈休息用イス(複数用)〉 この範疇には、いわゆる長イスタイプの「ソファ」が多く含まれている。この家具は、H=700, D=700~900, W=1200~2000の形状のものが標準的なものである。ソファの幅は、座席数と関係し、3人掛けだと1800前後、2人掛けだと1400前後が目安であるが、1990年以降購入のものに、2人掛けの寸法のものも多くみられる。

したがって、「休息用イス(複数用)」は、ソファとして最も一般的であったW=1800前後のものが中心ではなくなり、場所をとらないでより小型のものが好まれる傾向がある。同時に「休息用イス(一人用)」の呼称に「ソファ」を使用している例が多く、複数の人が使用するものと区別が無くなる傾向があった。

しかし、少数ではあるが、L字型のソファや、部屋に対して造りつけ的に用いる大型のもの

表3 造りつけ収納の敷設状態

部屋名	和洋	室数	押入	クローゼット	ウオークイン	その他	合計
K	洋室	22	0	0	0	25	25
LD	和室	10	6	0	0	2	8
	洋室	26	0	0	0	12	12
LDK	洋室	24	0	0	0	24	24
子供部屋	和室	16	14	4	0	3	21
	洋室	76	19	34	2	17	72
親の部屋	和室	41	33	3	0	20	56
	洋室	13	4	4	3	4	15
祖父母・叔父母の部屋	和室	12	6	3	0	9	18
	洋室	2	1	0	0	1	2
書斎・趣味室	和室	7	4	0	0	4	8
	洋室	8	0	1	0	4	5
和室・客室	和室	17	10	0	0	7	17

のもみられる。

座家具の形状を総括すると、ダイニングテーブルの大型化、休息用イス(複数用)の小型化といった動向が認められる。また、部屋に対して特注的にしつらえる場合は、大型のものもみられる。全般的には、座家具類の選択においても、部屋のしつらえ方に応じて、多様な家具を求める傾向があると想定される。

(3) 造りつけ収納

ここでは、部屋の種別ごとに「造りつけ収納」の種別がどのように対応しているかについて分析をした。(表3)

まず種別についてであるが、「LD」の場合和室には「押入」が敷設される傾向であるが、洋室には「その他の造りつけ収納」(戸棚や本棚など)がみられる。部屋の和洋によって、造りつけ収納の形式が異なっている。

つぎに私室については、「子供部屋」の場合、和室には「押入」がほとんどの部屋に敷設されているが、洋室には「クローゼット」の敷設が

最も多いものの、「押入」もそれに次ぐ割合で認められる。

「親の部屋」の場合には和室が多いがその場合「押入」の敷設がほとんどであった。しかし、洋室には「クローゼット」「押入」が同数であるが、「ウォークインクローゼット」も認められることから、「押入」よりは「クローゼット」中心と考えられる。

「祖父母・叔父母の部屋」の場合、最も多いのは「押入」でついで「クローゼット」である。

全般的にみて、造りつけ収納は、私室に多く認められ、寝具・衣類等の大型収納物を収納する必要があることを示唆している。

一方、部屋の和洋形式と造りつけ収納との関係に注目すると、和室の場合には、部屋の用途に関わらず「押入」の敷設が一般的であり、洋室の私室では、「クローゼット」や「ウォークインクローゼット」が多く認められ、公室では本棚などの「その他の造りつけ収納」が多く認められる。また、洋室の造りつけ収納は、内部の造作が棚式か、吊り下げ式などがあり用途によって異なったものが採用される傾向といえよう。

4. 部屋の種別と設置主要家具との関係

ここでは、それぞれの部屋には、どのような家具が主に置かれる傾向にあるのかを、先に記した8種の部屋について主要家具の設置状況を把握する。また使用されている家具の一般的な組み合わせを提示する。

表4に、部屋種別ごとに主要設置家具として、設置率が50%を越える家具についてと、造りつけ収納とを列記した。

〈K〉 設置される家具としては、「冷蔵庫96%」「食器棚68%」の2種の主要家具が挙げられる。それ以外に、「雑収納家具各種68%」として「棚」「台」「物入れ」などが多く置かれている現状が読みとれた。

〈LD〉 和室であれば「ローテーブル・こたつ」「テレビ」が置かれる。洋室であれば「ダイニ

表4 主要家具の設置状況

部屋種別	和形式	洋数	主要家具設置率	造りつけ収納種別	
K: 調理室	洋室	22	冷蔵庫	96%	その他の造りつけ収納
			食器棚	68%	
LD: 食事兼 だんらん室	和室	10	ローテーブル・こたつ	100%	押入
			テレビ	80%	
	洋室	26	ダイニングテーブル・イス	65%	その他の造りつけ収納
			休息用イス(複数用)	62%	
ローテーブル・こたつ	85%				
サイドボード	58%				
テレビ	77%				
LDK: 調理兼 食事兼 だんらん室	洋室	24	ダイニングテーブル	92%	その他の造りつけ収納
			ダイニング用イス	83%	
			食器棚	83%	
			冷蔵庫	96%	
テレビ	50%				
子供部屋	和室	16	机および事務用イス	63%	押入
			ベッド	56%	
	洋室	76	本棚	50%	クローゼット 押入
			机	76%	
事務用イス	66%				
ベッド	83%				
本棚	55%				
親の部屋	和室	41	整理タンス	59%	押入
			洋服タンス	56%	
	洋室	13	ベッド	62%	クローゼット ウォークイン クローゼット 押入
			整理タンス	54%	
祖父母・叔 父母の部屋	和室	12	上位家具ナン		押入
			洋室	2	
書斎・趣味 室	和室	7	机	86%	押入
			本棚	57%	
和室・客室	和室	17	机	50%	ナン
			上位家具ナン		

ングテーブル」「ダイニング用イス」が置かれる傾向であるが、「ローテーブル・こたつ」の数値も高くなっている。だんらんの家具である「休息用イス(複数用)」は、「ダイニングテーブル」よりは設置率が低いことから、「ダイニングテーブルおよびイス」か、「休息用イス(複数用)」+「ローテーブル・こたつ」しか置かない場合、また「ローテーブル・こたつ」のみしか置かない傾向もみられた。このことにより、洋室であってもユカ座での食事・くつろぎが行われていることも把握される。

〈子供部屋〉 和室・洋室の別にかかわらず「机および事務用イス」と「ベッド」「本棚」が主要家具であり、タンス類は低い数値となってい

た。これは「クローゼット」が造りつけとなる例が多いためと思われる。

〈親の部屋〉和室では「整理タンス」「洋服タンス」の衣類収納、洋室では「ベッド」「整理タンス」が主要家具である。洋室で「洋服タンス」の設置率が下がるのは子供部屋と同様「クローゼット」が造りつけとなる傾向と関係しているといえよう。

一般的に、部屋の規模が小さくなるにつれ、座家具類が減少する傾向があり、収納に関しては、造り付けの形状によって配置される種類が異なることがわかる。この結果は、各部屋にどのような家具が設置されるかの、今後の動向の目安と考えるとよいと推察される。

5. 部屋の規模と家具占有率との関係

ここでは、家具が部屋の床面積に対してどのくらい占有している状況にあるかを分析する。

図3に部屋の種別ごとによる部屋の床面積と家具占有率(以下占有率)との関係を示す。尚、「K」を含む部屋については「キッチンユニット」も占有率に含む事とする。

〈K〉床面積は10^m2までに集約している。占有率にはバラツキがあるが、比較的高い数値が多い。

〈LDK〉床面積が8~20^m2に分布し、占有率は40%以上が多い。また面積が大きくなるほど占有率は低くなる傾向がある。

〈LD(和室)〉床面積が10~20^m2に集約され占有率は20%前後で、低い数値となっている。

〈LD(洋室)〉床面積が8~30^m2の広い範囲に分布しているが、20^m2以上の大きな例がみられるのが特徴である。占有率は20~40%前後に集約され、どの床面積であっても一定の占有率に収束がみられるのが特徴である。

〈子供部屋(和室)〉床面積は9^m2に集約されているが、占有率はバラツキが大きい。

〈子供部屋(洋室)〉床面積は9^m2を中心に6~15^m2までの間に分布が見られ、「子供部

屋(和室)」に比べ床面積の大きな部屋があることがわかる。占有率はバラツキはみられるものの、12^m2以上になると40%弱に数値の収束する傾向がよみとれる。

〈親の部屋(和室)〉床面積は7~15^m2に集約し、占有率は部屋が広がるほど下がる傾向にあり20%未満の例も多い。

〈親の部屋(洋室)〉床面積は15^m2以上の大型の部屋が見られるが、占有率は20%以上が殆どで、「親の部屋(和室)」のような低い占有率となっている例は少ない。

〈書斎・趣味室〉床面積は7~15^m2に集約されており、占有率は20%以上が多くなっている。

〈和室・客間〉床面積は7~15^m2に集約され、占有率は20%未満に多く、低い占有率である。

全体的に総括してみると、公室については、「LDK」のようにそこでの行為が多いと家具の占有率が高くなることがわかる。また「LD(洋室)」「LD(和室)」の順で占有率は低くなり、これはユカ座での食事・くつろぎの傾向により家具量が少ない為と推察される。私室については「親の部屋」に比べて「子供部屋」は占有率が高い。これは「子供部屋」で主要設置家具の、ベッド、机、イスなどが高率で設置されており、逆に「親の部屋」は和室が多く、布団での就寝が多いためと考えられる。また「親の部屋」には、収納量の多い押入の敷設が多いことも関係しているであろう。「子供部屋」は特に、床面積が小さくても主要家具を設置した高い占有率の部屋である事がわかる。

6. ま と め

調査した住宅の家具配置を総括してみると以下のようにまとめられる。

①和室は洋室より小規模低占有率の傾向があり設置家具が少ない。②和室と洋室では敷設される造り付け収納の形状が異なり、それによって設置家具の種別が規定される。③家具配置は収

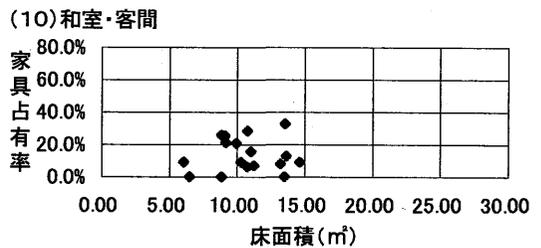
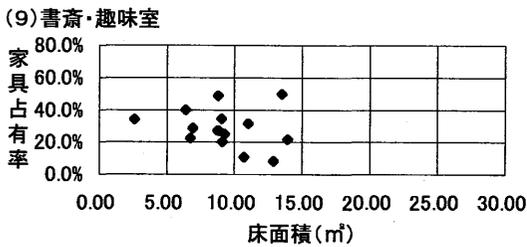
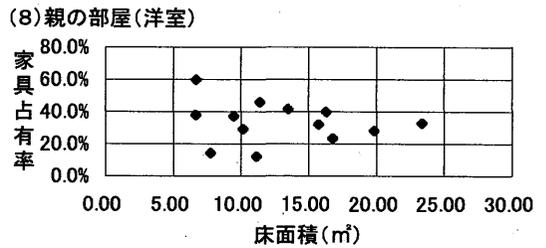
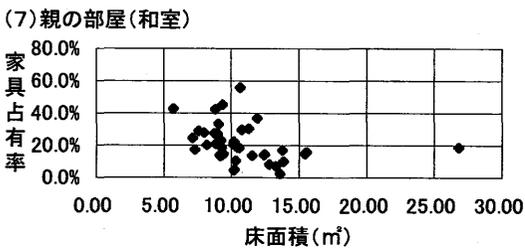
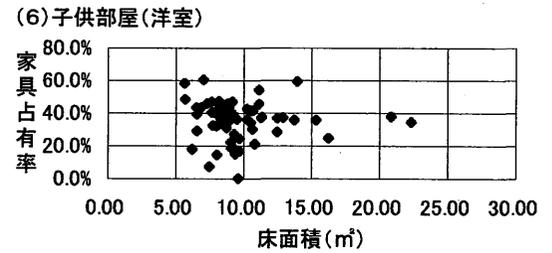
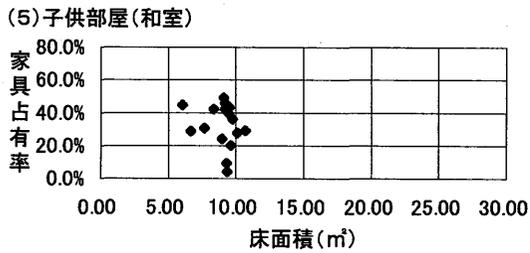
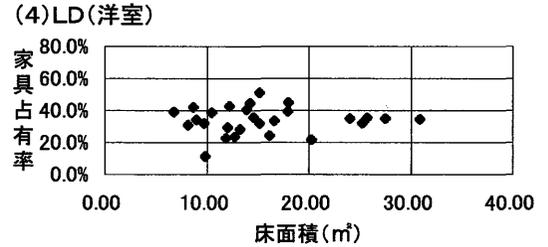
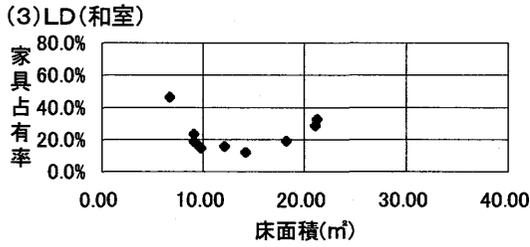
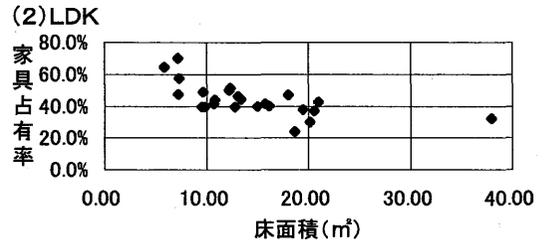
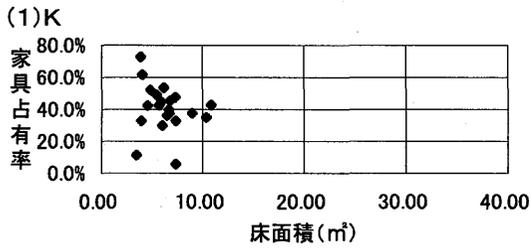


図3 部屋の床面積に対する家具占有率

納量を確保する為に大型の家具を置く場合と、造りつけ収納を充分確保することによる家具の少量化がみられる。④家具の占有率は、部屋の種別による傾向の違いが見られ、特に床面積が12m²前後になると、高い数値が減り一定の数値に収束される傾向がある。

以上のように、今回の分析で設計資料の基礎的データとして活用できるものがまとめられたといえる。これを利用することにより、部屋の使用用途によってどの種類の家具を置く部屋として計画するべきか、またその規模はどのくらいにするべきかの目安を示すことができると思われる。また、家具配置をする上で必要な、まとまった壁面の確保や、家具を置きやすい部屋のコーナー部の壁面形状の再考などにも活用できよう。

今後は、家具の占有状況に伴う壁面の活用や、家全体の収納量との関係などについても考察を進めたいと考えている。

謝辞

本稿をまとめるにあたりご助言を頂きました、沢田知子教授に深く感謝の意を表します。また、資料提供・整理においては本学学部の協力に感謝いたします。

尚、この研究は鹿島建設(株)からの委託研究の一部をまとめたものである。

注

- 1) 「建築設計資料集成」日本建築学会編 丸善株式会社
- 2) 「新しい室内構成の汎用設計—家具の配置と住まい方に関する実態調査報告書—」住宅・都市整備公団 1995. 12
- 3) 丸茂みゆき・沢田知子・谷口久美子「家具の保有・配置状態からみた住様式の動向と住戸計画その7—家具の寸法・形状の動向に関する考察—」日本建築学会大会学術講演梗概集 1998. 9. p 213~214